

追悼・中村生雄先生

日本語日本文学科主任 兵 藤 裕 己

昨年（二〇一〇年）の七月、中村生雄先生がお亡くなりになりました。三年ちかいご闘病のすえのご他界でした。

中村先生が学習院大学文学部の日本語日本文学科に着任されたのは、二〇〇五年四月です。先生のご専攻は、日本思想史、文化論、民俗学と多岐にわたりますが、先生は大学院を出てしばらく、春秋社の編集者をされていました。編集者時代につちかわれたアクチュアルな問題意識と、幅広い識見とが、そのお書きになる論文やエッセイを特徴づけていました。

わたしが中村先生とはじめてお会いしたのは、一九八〇年代のはじめ、先生が担当編集者をされた『大系・仏教と日本人』の企画にさいしてです。春秋社にほど近いお茶の水の喫茶店で、まだ大学院に在籍中の一執筆者と、編集者の中村さんという関係でお会いしました。その折、当時わたしが関心をもっていた折口信夫のミコトモチ論についてお話ししたところ、論の弱点をするどく指摘された先生の（並みの編集者にはない）深い学識にたいへん驚かされたことを、いまでも印象ぶかく覚えています。

その後、中村先生は、編集者から研究者に転身され、名著『カミとヒトの精神史』などをお出しになって、まもなく大学につとめられました。個人的にお会いする機会は長らくありませんでしたが、二度目にお会いしたのは、先生が大阪大学に勤務されるようになってまもない一九九〇年代のなかばです。

大阪大学の文学部日本学科の集中講義に、わたしを呼んでくださったのですが、その折、専門分野がきわめて多岐に

わたる優秀な大学院生たちに囲まれ、慕われている先生をまのあたりにしました。当時の先生は、『折口信夫の戦後天皇論』という、かなりポレミックな本を出版されたばかりで、大阪大学の近くの飲み屋で、その本についてお話をいろいろかがいました。折口信夫の人と学問（とくに天皇論）の現在性に照明があてられ、やがてその天皇論が折口論の中核となったのは、まさに先生のご本がきっかけだったように思います。

中村先生がお亡くなりになったことは、学習院大学にとってだけでなく、日本の文化学、思想史学、民俗学等の諸学界にとって大きな痛手です。たくさんのかたがたが、先生のご早逝をここから惜しんでいるのですが、学習院大学日文科の同僚という立場から、ここに、つつしんでご冥福をお祈りしたいと思います。